

インド旅行記

当山育英会常務理事

佐藤 俊明

はじめに

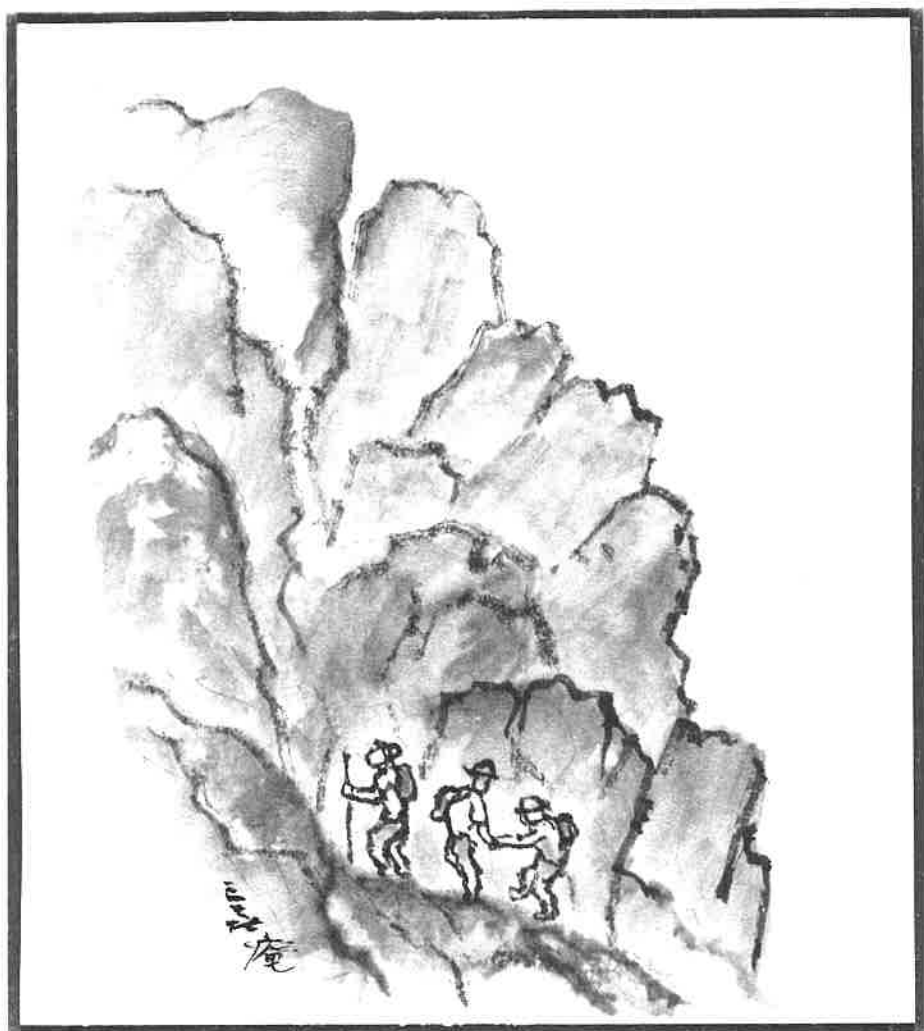
善光寺海外留学僧派遣育英会は発足当初、タイ国ワット・パクナムとアメリカはロスアンゼルス、スリランカに留学僧を送ることから出発したが、その後、インド、スリランカへの留学希望者があり、現にインド、スリランカにそれぞれ一名留学僧を派遣している。

今後、留学僧を派遣するとなると、当然受入先を確保しなくてはならない。そのためにはなんと現地を訪れて調整をはからなくてはならない。それなら仏蹟参拝もしなくては、と

いうことでインド旅行が計画された。

はじめは善光寺方丈さんと私との弥次喜多道中の予定だったが、日野屋（青木左右輔）さんが同行を希望された。日野屋さんは名カメラマンでもあるので、これは鬼に金棒と三人で出かけることになった。

女三人寄れば姦となるが、男三人を組み合わせた字がないので、姦といった特別な状態が生ずる恐れはないようだし、また男二人に女一人だと嬲（なぶる）という、これまた心配なことになるが、その心配もないし、気楽な男の三人旅はたして十二日間、どんなことになるだろう。



三月二十五日、午後三時五十分、成田新東京国際空港を飛び立った。週一便のカルカタ・ボンベイ行きなのに空席が目立つ。こんなことで採算がとれるのだろうかと思っていたら大阪で満席になったので成程と思った。学年休みのこととて子供連れが多い。中に子供連れの仏蹟参拝ツアーがあった。子供でも仏蹟参拝ができるようになったとはインドも近くなったものだ。それにしてもこの齢になるまで仏蹟参拝に出かけなかったとは怠慢至極なことだ」と反省させられた。

今から一、三〇〇年前、玄奘三蔵法師がシルクロードを通ってインドに行った時は、「砂漠には悪鬼、熱風あり」「遇えばたちまち皆死して全き者無し」「空に一飛鳥なく、地に一走獸な

し」「人骨、獸骨の類を以って行路の標識となすのみ」(『法顕伝』)といった実にけわしい危険な道をいのちがけて辿る旅だった。だから「入竺沙門」といえば称讃と尊敬を一身に集めたものである。ところが今日は飛行機で十時間少々で入竺できる。にも拘らず、色紙などに「入竺沙門 何某」などと麗々しくサインしているのを見かけることがある。玄奘三蔵気取りでいるのかと思うと片腹痛くなる。子供連れの仏蹟参拝ツアーを見せてやりたいものだ。

バンコクで乗客の乗り降りがあり、予定より三十分遅れてカルカタ空港に着陸した。日本時間では午前四時である。入国手続・税関の検査(同行の青木氏の所持したビデオは特に綿密に調べられた)を経て到着ロビーに出ると、善光寺留学僧安井隆同君と、昭和女子大で教鞭をとっている早田啓子女史、それに全行動を共にして案内してくれるヒロ・マンシユカーニさん



が出迎えてくれ、花のレイを二つも首にかけてもらった。一瞬ハワイに到着したかのような気になったが、ロビーから一步外に出た途端、インド到着の実感を押しつけられた。雑然とごみごみした人と車のはんらん。ふと、胸もとに黒い小さな手が幾本かのびて来て「マネー」「マネー」と哀願する声が耳に入った。見ればいたいたけな子供である。この真夜中にかわいそうとは思ったが、一人にやればどつと押し寄せてくるから、支えぬほうがよいと旅行案内書にも書いてあるし、まだルビーに換金もしてないので無視した。

ホテルに着いたのが三時、日本時間では六時半なので丸々一晚徹夜したわけだが、飛行機で少々仮眠をとったせいも、それとも興奮のせいか眠くはない。もう水のようになっているシャワーを浴びてベッドに入ったが寒くて眠れない。日中クーラーがきいていたためだろう。起き上

って寝巻の下にセーターを着込んでようやく眠りについた。いい気持で眠っていたら電話のベルが鳴った。十時のモーニングコールか？ そんなに眠ったのかなアと、思つて受話器を取ると、「お茶の準備ができましたからどうぞ」という方丈様の元氣な明るい声だった。時計を見たら七時。やはり眠れなかつたのかと思ひ、仕度をして出かける。固型燃料で日本から持参した水をわかしている。インドではじめて飲む日本のお茶の味はまた格別だった。

カルカッタ最高のホテルとはいつても、特に水に関しては油断がならない。これだけの慎重さが必要なのである。ルームにあるポットの水は火を通したとはいうが、ほんとに煮沸したものでどうかは保証の限りではない。ヒロ氏も飲まぬようにと注意してくれた。

帰国してわかつたことだが、このホテルで出した数枚の絵葉書はいずれも未着である。郵便

物は郵便局でスタンプを押したことを確認しない限り信用はできないと聞いてはいたが、一流ホテルのフロントでさえ切手を金に換えてしまうのだから恐れ入る。航空便、わずか四ルピー、五十円程度のことだがこのていたらくなので、他はおして知るべしである。

それだけインドは貧しいのである。安井君を指導してカルカッタ大学の助教授、勤続二十五年で月収わずか五〇〇〇ルピー、六五〇〇〇円とのこと。大学卒の初任給が七、八〇〇〇ルピーというから一万円ちよつと。土木作業員の日当が一五、六ルピーというから二〇〇円、敗戦直後ニコヨン(二四〇円)という言葉があつたが、あの頃を思えば大体想像がつくのではなからうか。

反対に金持となると、これまた日本では想像もつかない大金持が大邸宅を豪然とかまえている。

安井君がマザー・テレサの「死を待つ人の家」に案内してくれた。人口七億のインドでは路上で息を引き取る人の数は私共の想像をはるかにこえるものであろう。そうした路上に死を待つ人びとを収容し、食事を与え、治療を施し、死ねば茶毘まで面倒をみてやるのが「死を待つ人の家」である。私共が訪ねた時は折悪してマザー・テレサは不在だった（彼女はほかに三つの施設をカルカッタに持っているという）。瞳の美しく澄んだシスターが応待してくれた。方丈さんはその浄業に対して金壺封を喜捨した。

男女別の棟に、列車のB寝台よりもせまいベッドが六〇センチくらいの間隔にずらりとならび、死を待つ人びとが寝ころがっている。奥にはヒンズー教、回教等、宗派別の霊安所があっ



茶店で

た。

西欧の人マザー・テレサがこのような施設を設けて救済の手をさしのべているのに当のインドではどうしているのだろうか。ふと、八年前カンボジア難民のキャンプを訪れた時のことを思い出した。そのころ、東南アジア難民の救済問題が国際世論をゆるがせており、ことに日本及び日本仏教徒に対する風当りは強く、「金は出すが難民の受入れを渋っている」「物はよこすが人はよこさない」「同じアジアの仏教徒同志でありながら、日本の仏教徒は何もしない」こうしたきびしい批判の中で曹洞宗はおくれはせながら、といつても他の宗団にさきがけて、昭和五十四年二十人の調査団を現地に出かけた。私もその中の一員として、キャンプに出かけて難民の悲惨な姿をじかに確かめることができた。まず同じ仏教徒としてタイ国の仏教教団がこの問題にどう対処しているのか、できれば共同

歩調をと思い、タイ国寺院を訪ねてみると、教団としてはなんら活動していないというよりは、戒律上、また僧団の機構形態からして、政治問題化するおそれのある対社会活動は禁止されているとのことだった。なるほどキャンプにはタイ僧の姿は見えない。逸早く救援の手をさしのべ、献身的に活動しているのはアジアの仏教徒ではなく、西欧のクリスチャンだった。彼等はボランティアとして機を失せずやって来ているのであった。

いま「死を待つ人の家」に来て、八年前の難民キャンプの再現であるかのように感じた。

インドの代表的な宗教はヒンズー教である。その教儀については一知半解を持たないが、タイにおける仏教がそうであるように、自らの救いが主眼であろう。カーリーガート寺院はヒンズー教の女神カーリーを祀るもつとも神聖な、カルカッタの守護神的な寺院で、カルカッタの

名はここに由来するといわれるが、ここでは幸運を求める信者が引き連れてきたいけにえの山羊の首がはねられている。こんな具合に自らの幸せを求めるのがさきで、死に瀕した人に手をさしのべることは考慮の枠外のことなのだろうか。

二二

三月二十七日、四時起床、朝食は機内で食べることにして四時半空港に向けて出発する。インドの誇る国産車アンバサダーは悪路に強いのが自慢というだけにスプリングが堅くて乗り心地はジープなみ。おまけに乗った車がジーゼルエンジンだったのでYS11なみの爆音だった。道路は中央一・五車線ぐらいいしか舗装されていない。すれちがったり追い越したりする時はよほどよけてもらわないとどちらか一方の車輪

が舗装部分からはみ出てしまう。だから「どけ！どけ！」といわんばかりにやたらに警笛を鳴らして威嚇する。日中市内は雑踏をきわめスピードなど出せるものではない。その欲求不満の爆発か、早朝ほとんど車の通らない空港への道を、アンバサダーをフルスピードで飛ばす。前に走ってる車があるときかんに警笛を鳴らして追い越すが、中に負けずにスピードを出す車があつて、マフラーから火の粉を吹き散らしている。彼らはレーサー気取りているのかも知れないが、乗客の私共はたまったものでない。三十分ハラハラさせられてどうにか無事空港に着きホッとすする。つけ加えておくが日本の神風タクシーどころではない。

二時間のフライトで八時十五分、ビハール州の州都パトナに着く。空港前には私共の一三〇〇キロの旅を運ぶアンバサダーが待っている。「こんな車で大丈夫なのだろうか」と不安にな



ったが、ヒロさんがよくチャーターしている車とのことなので運を天に任せることにした。

パトナは紀元前三世紀のころアシヨーカー王がここを首都にしたそうだが、釈尊の時代はまだ一小村に過ぎなかったという。

八十歳になられた釈尊は死期の迫ったことを身を感じられたのであろう。ある日、王舎城を出て故郷カピラバーツに向けて旅立たれるのである。ナーランダまで十二キロ、ナーランダから八八キロの道を歩まれ、ここパトナで大勢の弟子たちと別れ、阿難とごくわずかの弟子を連れてガンジス河を渡られるのである。釈尊が渡られた「ゴータマの渡し」にはそれらしい遺跡はないが、多分この辺だろうといわれるところに立って対岸バイシャリを望み見た時、酷暑のこの地で私より十歳年上の釈尊の旅はどんなにつらいものだったろう。「自分は老い朽ち、齢を重ねて老衰し、人生の旅路を過ぎ八十となっ

た。私の体は、ちようど古い車の革紐の助けによつてやっと動いているのと同じようなものだ」と、釈尊は侍者の阿難に述べたという經典の言葉を思い出して涙を催すのであった。

「ゴータマの渡し」をあとにして、一路ナールランダに向つた。途中、道路工事に伴なう渋滞に巻き込まれ、ナールランダに着いたのは一時過ぎだった。時速二〇キロしかのびないとは全く予想外だった。

ナールランダには西暦五世紀のころ大僧院が建てられ、その後数世紀にわたつて大学として盛名をはせたところである。

七世紀の人玄奘三蔵が渡印の途次、益州空恵寺において病める老僧から原語で、般若心経を口授され、その後の旅において苦難に遭遇するたびにこれを唱えて難を免れたというが、玄奘三蔵はナールランダ寺においてこの病僧に再会するのである。するとその病僧は「われは観音菩

薩なり」と玄奘に告げて中天に消えたという伝説があるが、ナールランダの僧院跡に立つて、「玄奘三蔵と病僧が再会したのはどのへんだらう？」とあちこち見廻わしていると、いまにも玄奘三

蔵がやつてくるのではないかというような気がしてくる。ここの遺構がかもす幻想であろうか。

ナールランダからラジギール(王舎城)までは一二キロ、ほこりにまみれて法華ホテルに着き、日本語で出迎えられた時は、日本に帰つたような気持だった。

四

仏蹟参拝は十月下旬から三月中旬までが適期で、その前後はほとんど参拝者がないという。また、シーズン中といえども参拝者は決して多いものではなく、法華ホテルの昨年の実績は三、五〇〇人、うち日本人は一、七〇〇人とのこと

だった。精々この程度のことなので、巡拝者相手の宿泊施設提供は採算のとれる事業ではない。したがって都市部から離れた、不便な地にある仏蹟はみな公営となっている。これは三、四日後から体で感じ取らせられることなのだが、公営施設は貧弱、設備は不備で、サービスなどは期待できるものではない。それどころか、ドアのない便所、湯の出ないシャワー、やもりの匂う部屋（ガイドのヒロさんは、やもりが天井から顔の上に落ちれば強運が訪れるというが、落ちないことのほうが幸運だと思う）、蚊の襲撃ぐらいは覚悟しなくてはならないのが現状である。

そうした情勢の中で、法華クラブが、全く採算を度外視して、莫大な資金を投入してホテルを建て、かつ経営していることは絶賛に価することであり、仏蹟参拝者にとつてまことに有難く、日本語と日本料理で迎えてもらえることは正に砂漠のオアシスである。今後の健闘を祈つ



大菩提会本部にて

てやまない。

シャワーを浴びて午睡をとり、四時過ぎ日本山妙法寺を拝登し、藤井日達上人の偉業を偲ぶ。帰途、不幸な母親韋提希夫人が牢獄の窓から霊鷲山を望み見て釈尊に救いを求めたというその牢獄跡に立つて霊鷲山を仰ぎ見た時、王舎城の悲劇として伝えられる観無量寿経の物語が急に現実味を帯びてくるのであった。

竹林精舎を建てたのは、韋提希夫人を后きさきとした頻婆沙羅大王である。竹林精舎はその名のごとく竹林に囲まれた精舎で、静かな修行に適した場所であったことと思う。

翌朝、霊鷲山での日の出を仰ぐべく五時ホテルの玄関前に出て空を仰ぐと、ひときわ輝く星があった。「あの星は？」とホテルの高島支配人にたずねると、「あれが明けの明星です」という。ああ、やはりあれがそうだったのか。あれが明けの明星かと思った時、ふと二五〇〇年の

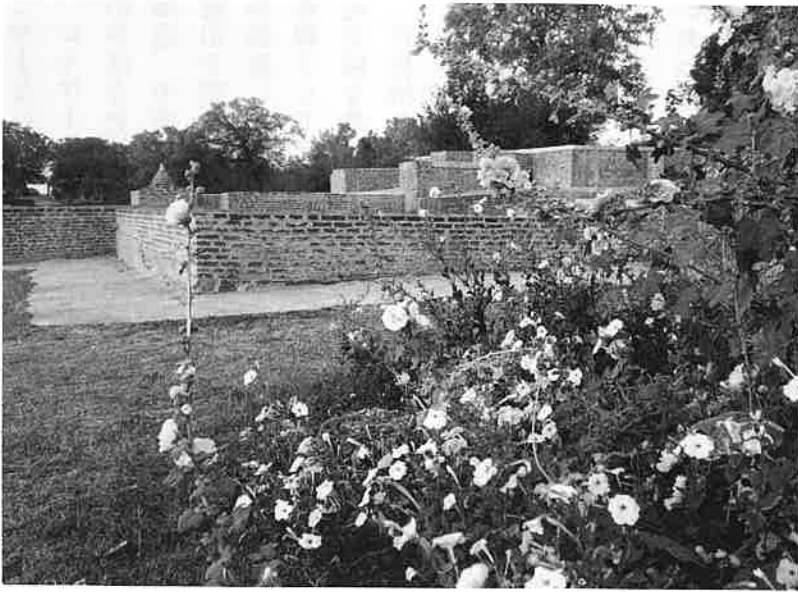
時の流れを超越して、つい四ヶ月前の十二月八日の明け方、釈尊が正覚を成ぜられたといった錯覚と親近感をおぼえた。そして霊鷲山では逆に、釈尊の御座所の前に正座して寿量品偈を誦して「常在霊鷲山」永遠の時の流れを感じた。

五

三月二十八日、霊鷲山をおりてホテルで朝食をとり、ブタガヤに向かう。七十六キロの行程である。割に順調に走り、お昼前ブタガヤのトラベル・ロッジに着いた。

ここではじめてインド料理に出会う。私は雑炊が好きなのだが、インド料理は雑炊の原点ではなからうか。また私は南方の植物を見るとなんとなく懐しさを感じるところからみて、私の祖先は南方系ではないのかと思ったりする。

さて、食べ物話が出たついでだが、苦行林くぎんりん



ナーランダ大学

を出て尼^に蓮^{れん}禪^{ぜん}河^がに沐浴してたおれた釈尊に、ス
ジャータ（純陀）という娘が供養したという乳^{にゅう}糜^び
とはどんなものなのか、インドに来たのでぜひ
知りたいと思っていた。ヒロさんに聞くと、そ
れはキールという、米を牛乳と砂糖で四、五時
間も煮た乳粥だとのことだったが、ゆかりの
この地でデザート代りに出してくれた。甘くて
おいしいものだった。

スジャータに乳糜の供養を受ける前のことだ
が、釈尊は村の青年の歌を聞いて苦行と別れる
決心をされた。

絃^{じゆん}が強^いけりや強^いくて切れる

絃^{じゆん}が弱^いけりや弱^いくて鳴らぬ

しめずゆるめず調子を合わせ

手ふり足ふりリズムに踊れ

この歌に出てくる絃楽器は何なのか。これも
インドに来たついでに確かめたい一つだったが、
それがシタールという楽器であろうことがわ

かった。胴が南瓜でできているところからして相当古くからあったものと思われる。

それから、車で走っている時、道を歩きながら木の小枝を噛んでいる人が幾人かあった。歯みがきの原点をまのあたりに見て、やはりインドだなアと感じた。道元禪師は『正法眼蔵洗面の卷』に次のように述べている。

『華嚴經』には「手に楊枝を取ったならば、自他共々に心に正法を得て、自然清浄ならん」と心に念じ、次に楊枝を使うに当たっては「自他共々に歯をみがき、煩惱をかみくだいて仏道を成ぜんことを」と祈念すべきであると、歯をみがくことは自分一個人の問題ではなく、公衆衛生であり、さらに進んでは仏道修行そのものである。

『摩訶僧祇律』^{まかそうぎりつ}には、楊枝の長さは短くて指四本、長くて指十六本、太さは小指の厚味大で、一端は太く一端は細く、太い端をこまかく噛む

のであると書いてあり、また『三千威儀經』^{さんぜんいぎきょう}には「楊枝の先は三分以上かんではならない」とあり、「よくかんで、歯の上や裏をみがくようにとき洗うべきである。何度もとぎみがき、洗いますぐべきである。口をすすぐことを何度もすれば清浄になる、と。

楊枝とは楊柳の枝のことだが、インド人が噛んでいるのは何の枝か。それはニームの樹の枝であった。私も五、六本小枝を折ってもらったが、彼らが無雑作に折ってくれたものはいずれも指十本ぐらいの長さだった。素人目に見たところでは楊柳とよく似ている。きつと楊枝と同じ成分の樹液を出すものではなからうか。というのは、「洗面の卷」には、「毛を馬のたて髪のように植えた楊枝、つまり今日の歯ブラシ様のもので歯をみがくものがあるが、これは不浄な器具であり、仏法の道具ではない」と書いてある。これは一体どういうわけだろう。動物の毛を用

いたというだけではないだろう。歯ブラシを使っている現代人には抵抗のある言葉である。そこで歯学部のある鶴見大学の三輪学長にたずねたら、虫歯の原因はストレプトコッカス、ミュータンスとか、サングイスなどの菌が出すデキストランという粘着性の強い液が歯にべったり、しっかりと粘着して、歯くそとでもいうべきプラグの中で菌がウヨウヨ巣をつくり、砂糖を餌にして酸を出し、この酸が歯をむしばむのだ。そう、楊枝をかむと、その樹液が酸を中和する。したがって、楊枝をかむことには物理的効果とともに薬学的効果があるが、これに反して、歯みがき薬剤のなかった当時であれば、ブラシで歯をみがくことは、こするという物理的効果しかなかったからであろうとのことだった。ついでにいま一つ。『三千威儀経』には、「舌をこするのには、まず第一に、三返を過ぎてはならぬ。第二に、舌の上部に血が出たらやめよ……」とあ

る。私も子供のころは、柄が竹製の歯ブラシがあつて、柄の中段が薄くなつており、そこで舌をそいだものだが、なぜ舌をこするのかが、それは味蕾（舌の粘膜内にある卵形の小体、感覚細胞から成り味覚を掌る）の上を掩うた前記の粘着性の強い液を除去して、味蕾の機能を發揮させるためのものだろうとのこと。

こうしてみると、古代インドの医学はまことにすばらしいものであり、それを身につけて、仏法にまで深化して説かれた釈尊は実に偉大なお方だと三嘆を禁じ得ない。

その釈尊が正覚を感じられたことを記念するブダガヤの大塔にいま詣でることができたのである。菩提樹があり金剛宝座がある。仏教徒にとって感激でなくて何であろう。

六

巖谷勝雄師いわやしょうゆうが畢生の力を傾けた印度山日本寺を訪れる。靈鷲山に日本山妙法寺あり、ここに印度山日本寺あり、日本仏教ここに在りと誇り高きを覚えると共に、これらの寺院が今後真に釈尊の慈悲を現代に具現するには、インドの地に骨を埋むる覚悟の人材の輩出が望まれてならない。

この時にあたり佐々井秀嶺師に相逢うことができたことはまことに力強く有難いことだった。このたびの渡印は仏蹟参拝に加えていま一つ大きな目的があった。それは冒頭に書いたように、海外留学僧のインドにおける受入先を確保することだった。

佐々井氏は、方丈さんと共に二十年前タイ国ワット・パクナムで修行した間柄であり、師はその後インドに渡り、インド民衆のよき指導者、救済者として刻苦精励、いまや民衆の絶大なる信頼を得ている人である。

彼については堀沢祖門師が『求道遍歴』に「ナグプールの仏教復興運動」の一章を設けて紹介している。二、三摘記すると、

「ナグプールにおいても、佐々井上人は、ラジギールでそうであったように、獅子奮迅の精進をつづけた。自分自身の決意を新たに、かつこんごの法道への祈願をこめて一週間の断食断水行をやったことも、ナグプールの仏教徒を感動させ、彼らを奮い立たせた。

日本人僧「スレイ・ササイ」の名は一躍ナグプールの全仏教徒に知れ渡ったのである。」「やがて上人は仏教徒の強い要請にに応じて、ナグプール市内の仏教徒の町につきつぎと寺院を建立していった。かなりの規模のものもあればほんの申しわけ程度のものもあったが、何しろ財政的にゼロの状態から出発するのである。

私が三カ月の滞在中に直接協力した寺は、パ

ンチシーラ寺院であつたが、二人は毎日基金勸募のためにパンチシーラの人たちと街頭修行しながら戸別訪問をして募金した。

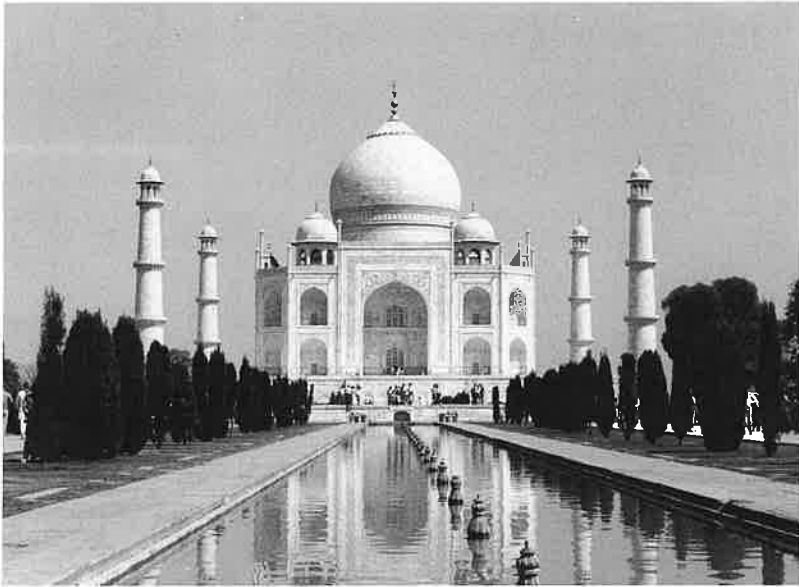
それだけでは充分ではなかつたので、佐々井上人はあらゆる機会をつかんで基金をつくらうとした。たとえば、改宗式・結婚式・命名式あるいは講演会等の要請は何でも引き受けた。それらに出ればそれなりに五ルピー、十ルピーのお布施が期待できたからである。このようにして、少しづつセメントを買い、レンガを手に入れながら各町の寺々はゆつくりと、しかし着実にその数を増していったのである。”

“佐々井上人はサンガラトナ少年が法器であることを見抜き、かつまたインド仏教の復興はあくまでもインド人自身の手によらねばならぬことを予見して、サンガトナを大乘仏教の国日本へ送りこむことを決意した。”

右によつて佐々井師の輪郭がおおよそ御理解いただけるかと思うが、私共が日本寺を訪れた時、前三日間ここで全インド比丘僧びくきんぎやの会議があり、彼はそれに出席のため日本寺に滞在しており、私共の到着を待っていてくれた。

方丈さんが二十年ぶりの再会を喜び、「さつぱり日本に帰つて来ないもんだから心配してたよ」というと、彼は「日本に帰ればインドに戻りたくなくなると思うから日本には帰れないんだ」という。その言葉を聞いた私は、すでにインド人になり切っている師の姿に思わず合掌した。

彼は、「インド留学僧は引受けるよ。私は全インド比丘僧伽を動かすことのできる立場にある。安心して任せてくれ」(佐々井氏は目下ブダガヤに建設されるインド僧根本道場建設委員長に任命されている)と力強く言ってくれた。留学僧のインド派遣に明るい見通しが立ったことは有難い仏縁だった。



タージ・マハール

このような人のあとを継ぐ人材をインドに送りたいものだ。さいわいは日本寺あり妙法寺あり、この寺を生かすのは人、人、人である、と泌々感じた。

七

三月二十九日、今日は二六五キロの強行軍である。涼しく、道路がすいているうちにできるだけ走破しようと四時起床、直ちに出発。八時間の旅である。

六時の日の出のころまでは涼しいがだんだん暑くなり、道路もこんでくる。クツシヨンは悪いし、冷房車でないので開けた窓からほこりは容赦なく入ってくる。お互いしゃべるのもおっくうになり黙りこくってしまふ。

インドの車にはほとんどサイドミラーがないし、テールランプもつかない。トラックなどは

うしろが見えないので、頼りになるのは警笛だけ。だからトラックのうしろには、どの車にも Horn Please と大書してある。交通事故の時などはホーンを鳴らさないほうが負けだともいうから、とにかくやたらに警笛を鳴らす。その騒々しいこと、日本などでは到底想像も及ばないところである。

さいわい私は軍隊で通信をやったので、モールス信号を知っている。警笛がみな字に聞えるので退屈しなかった。モールス信号はご存知のとおり点と線の組み合わせで、三点の長さを一長音の長さにすれば字になる。運転手はモールス信号を知ってるのかしらんと思うくらい割に正確に文字を打ち出す。よく鳴らされたのは・(へ)、・・(濁点)、・・・(ラ)、・・・・(ヌ)、――(ム)、――(ヨ)、――(レ)、――(コ)、――(イ)、・・・(ウ)、・・・・(ク)、――(タ)、――(ホ)、――(ハ)、――(ヤ)などで、

たまには・――(ヲ)、・――(カ)なども鳴らされていた。これが組み合わせられるとおもしろい。―― やい! と鳴らしても相手がどけてくれないと―― ・・・ごら! と鳴らす。偶然にしてはでき過ぎていると思うかも知れないが、一度たしかにあった。また、―― をい! とか―― よい! 等々。

また、車のナンバーを見ているとこれまた退屈しなかった。―― ・―― やい、やい! と警笛を鳴らしてもいつこうに道をゆずろうとしない車がある。ナンバーを見ると、なるほどこれじゃ! と思った。一八七八(嫌な奴)だった。恐ろしいスピードで迫ってくる大型トラック。あわや衝突かと思った途端に急停車した。"ひどい奴だなア"と、ふとナンバーを見ると一五六四(人殺し)とあった。三六三二に会ったら間もなく七六七六がやって来た。"弥勒

さんに南無南無か。そうかと思えば四一八三に出会い、宵闇か、宵闇迫まれば、と思つて眼を皿のようにしていたら来た、来た。七八三八(悩みは)はてなしはとうとう見つからなかった。七九七四(泣くなよ)と慰めてくれる車もあれば、四六四九(よろしく)もあり、夕方なのに〇八四〇(おはよう)とやってくる車もある。

さて、ブダガヤで正覚を成ぜられた釈尊は、引き続き一週間菩提樹下に坐し、やがて伝道を決意する。そこで托鉢しながら初転法輪のため足を運ばれた釈尊のスケールの大きさ、慈悲の宏大さは全くもって驚嘆のほかはない。

サルナートはヒンズー教徒の聖地ベナレスの東北方数キロのところにある。有名なダメーク塔は目下修理中だったが、緑の多い静かな、さすがは修行者の集まった聖地かと感じた。ダメーク塔の表面を飾る唐草模様を見て、ムーラガンダクティ寺院の金箔の初転法輪像と堂内三面

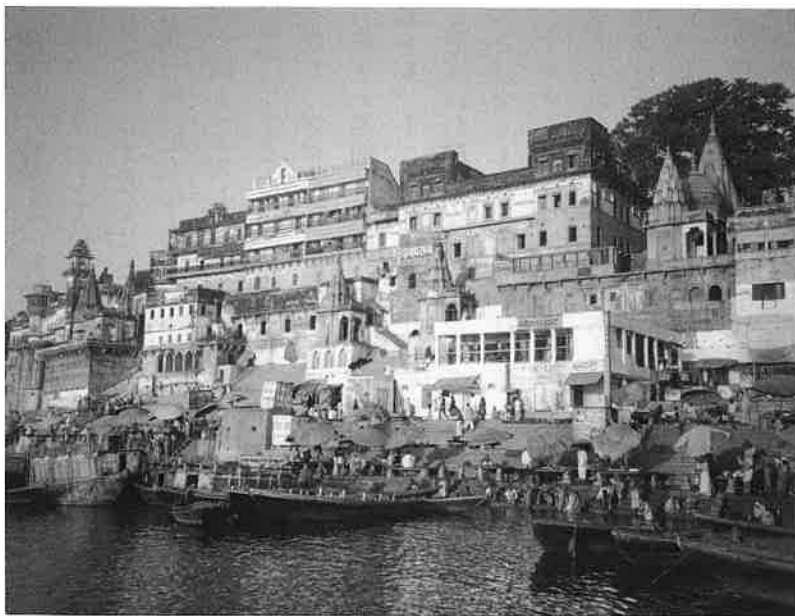
に描かれた野生司香雷画伯の壁画釈尊伝を見て、そして博物館に足を運んだ。

途中、車はオイル・パンをいためたんじゃないかと思われるような衝撃を受けたが、どうにかベナレスのホテルにたどり着くことができた。さいわい運転手はベナレスの人だったので、私共が休んでいる間に整備工場に行つてなおしたのだった。

八

三月三十日、五時に起きてガート(沐浴場)に向かい、小舟に乗つて沐浴風景を見る。

ガンジス河はこの地での字形に曲りながら南から北東に流れている。街は西岸にあるので日の出を拝むことができる。ここに多くの沐浴場と旧藩王の館、その奥に尖った屋根の寺院などがある。沐浴場は水面下に連なる石段で、水位が大きく変化しても沐浴ができるようになっていいる。はじめ



ガンジス河畔

は王侯や富豪が造つたものだが、いまは広く一般の使用に開放されている。

鐘が鳴って読経が流れる中、遠近各地からやって来た人であろう、実に多くの人びとが沐浴している。そしてガートのわきにある火葬場からは煙があがっている。死体が川に投げこまれる。そういえば昨日、こちらに来る途中、前を走っていた車のトランクからコモに包んだ棒のようなものがはみ出していた。車の振動でそれが死体の足だとわかった時はいささか驚ろいたが、聖なる河ガンジスに運んでいるのだと知った時、インドの心にふれたような気がした。

この日もベナレス泊りなので午睡をして休養をとり、涼しくなつてから街の見物に出かけたり、ヨガ、蛇使い、猿まわしなどの芸をホテルの中庭で見物したりした。

三月三十一日、今日は二七三キロの行程なので四時半に出発する。目的地は釈尊入滅の地クシナ

ガラ。割に順調にいつて正午少々前トラベル・ロ
ツジにつき昼食をとる。

ここにはビルマの仏教徒が建てたという総大
理石の涅槃堂とコンクリート造りのスト・パがあ
り、そのまわりにはレンガ積み of 精舎の遺構が
往時をしのばせている。涅槃堂内には大涅槃像
があり、香花が供えられており、参拝者を涅槃
像を合掌してまわり、像の一部に手をあてては
その手を自分の額にあてている。涅槃堂の近く
には釈尊の遺骸を荼毘に付したラマバル塚があ
る。

五十三キロの道をゴラクプールに戻り、ここ
で一夜を明かす。

明日はいよいよ国境をこえてネパールに入る
のかと思ひながらホテルに入って階段に足をか
けた時、ふと、戦時中、国境の町ポクラニチナ
ヤ、綏紛河のポクラホテルの階段で、「五人の斥
候兵」を書いた大久保中佐とばったり出会った

ことを思い出した。四十数年前のホンのちよつ
とした出会いが記憶によみがえるとは、戦時中
に養われた国境に対する特別の意識のなせるわ
ざであろうか。

九

四月一日、四大仏蹟の最後の巡礼地ルンビニ
に詣でる。一二五キロだが途中国境をこえなく
てはならない。出国・入国手続きは併せて一時
間ぐらいのものか。ネパールに入ると人の顔付
きが違ってくるのに気付く。と同時に空気も澄
んでいるように感じた。

一九六七年四月、つまり今から二十年前、ビ
ルマ出身の仏教信者であるウ・タント氏が国連
の事務総長としてネパールを訪問した際、ルン
ビニの開発計画を国際計画として取上げるよう
提案した。それによると、ルンビニに、参拝者

や旅行者のためのセンターをつくろう、それには地元ネパール国はもち論、世界の仏教国が協力してこの計画を成就せしめようではないかと要請した。この計画は国連の技術援助の一環として取上げられ、国際ルンビニ開発委員会が国連のネパール代表事務所を設置され、十三ヶ国がそのメンバーとなり、それと別に国家レベルのルンビニ開発委員会が、韓国、タイ、スリランカ及び日本に設置され、日本ではそれを助けるためネパール友好協会が結成された。

政治家であり、仏教信者であった元衆議院議長の故益谷秀次氏がこの事業の重要性を提唱され、この事業についてのパイオニアの役目を果たした。そして、益谷氏亡きあとルンビニ開発委員会の委員長を引受けたのは衆議院議長故船田中氏であった。

昭和五十二年、ネパールの高僧ア Nil 師がルンビニ計画促進のため来日された。その際、

ルンビニ開発委員会とネパール大使館が共催してア Nil 師歓迎の昼食会を尾崎記念館で開いた。私は故岩本禅師の代理として出席する機会を得、その時、旧知の間柄である佐藤忠雄氏（当時氏は参議院決算委員会調査室長だった）に会い、ルンビニ開発計画について詳しく知らされ、また、益谷氏亡きあと、氏の秘書であった東一（はつ）氏を紹介された。東氏は益谷氏の意を体し、ネパール大使館と連絡をとりながら、幾度かルンビニを訪れ、施設改善に地道な努力を続けられたのだが、その後の進展状況を伺うと、ネパール国は国柄が違うだけに、日本人のわれわれが事を運ぶのとは違って、なかなか思うにまかせず、いささかいらだち気味だといっていた。

国連のルンビニ復興計画書はとくに完成承認されており、それによると、巡礼者や旅行者のために適切な設備を完備し、博物館、図書館、

研究所、集会所、各国僧院まで完備したものであり、それらがアシヨカ王の石柱を中心としたルンビニ・センターとなっており、総工費五千万ドル。そのうち約半分の土地買収、道路、水道、水路施設は地元ネパールが負担し、あとは各国からの寄進に頼るもので、とくに経済大国日本に期待するところが大であるという。(佐藤忠雄氏の話)

この壮大な聖地建設計画は一九八五年を目指しているというのだが、現にルンビニに足を運んでみると、計画は何一つ実行に移されていない。まことに寂寥の感を禁じ得なかった。にも拘らずルンビニの隣りにはりっぱなネパールの寺院が屹立しており、ルンビニをへいげいしているがごときである。仏教大国日本の奮起を切望してやまない。

参拝終えてバルランプールまで二二五キロを移動するのだが、途中で後輪パンク。スペヤを



ブッダガヤの大塔にて

入れ替えたなら、これまた空気圧が低くて走れそうもない。のろのろ走って二キロほどしたら修理屋があったので助かった。このトラブルで二時間を空費したが、さいわい丁度お昼時だった

のでこの間に昼食をとった。

バルランプールのマヤ・トラポテルはかつて王侯の邸宅だったとかで、建物と庭だけはいりっぱなものであった。

十

四月三日、サヘト、マヘトへ向かう。サヘトには「祇園精舎の鐘の声、諸行無常のひびきあり……」で日本人の誰しもが仏教的感慨を抱く祇園精舎跡があり、その近くに日本国祇園精舎の鐘の会の造立になる祇園精舎の鐘がある。

さすがはスタツタ長者が、「黄金を敷きつめても売らない」という祇陀太子の土地を買い取って釈尊に寄進しただけであって、祇園精舎跡はまことにすばらしいところである。

ここ祇園精舎は王舎城からの距離直線距離で五百キロある。釈尊は四十五年の教化活動の間、

祇園精舎には六回、王舎城には二十二回安居しているという。炎天下八〇〇キロの道を六回も往還するとは全く起人的という以外には言葉がない。

大塔や僧院など壮大なレンガ積みの基壇が残っているが、ここから東方数百メートルのマヘトには舍衛城の跡がある。

ここからラクノーまで一六五キロを走破し、ラクノーから飛行機でニューデリーに着いたのは夜の十時半過ぎだった。

四月三日、朝五時出発、ジャムナー河沿いに二三〇キロほど下ったところにあるアグラに向かう。さすがは首都ニューデリーの近辺だけに道路はよく整備されており、ここには日本製の車もチラホラ見える。私共が乗ったのもトヨタのマークIIで、冷房が入って乗り心地もよく、乗り心地だけは日本に帰ったようだった。

タージ・マハールは二十二年の歳月を費して



造った世界最大の大理石建造物だけに、まことにとほうもないもので、インドに来たほとんどの人が訪れるところであり、あまりにも有名なので何も書く必要はないかと思う。

帰途、マトウーラに立寄り、博物館で仏教美術のすぐれた作品に接した。ここの仏像群は、ガンダーラの仏像がギリシヤ彫刻の影響を受けて端正なのに対して、ふくよかな丸味を持ったインド風なものとして知られている。

翌四月四日、市内見物、ご承知のようにこの街はニューデリーとオールドデリーの二つから成る。ニューデリーはインドにしてインドにあらずといわれるくらい西欧的に整備された街であり、ここにはほとんどいいほど牛の姿を見ない。

牛はヒンズー教徒にとつては神聖な動物であり、その数は人間二人に一頭といわれるほどだから億単位の数であろう。農村ならともかくも、

近代都市のどまん中に牛がこのこ歩きまわる。

これは、あらゆるものが雑然と混在して生きているインド社会ならではのことである。しかしこれでは街の近代的整備ははかれない。ニューデリーは牛を隔離したのであろう。とにかくニューデリーはインド的でない面を多く持つ都市である。

夕方空港に入ったが、飛行機の数の少ないこと、発着の便数の少ないこと、これが一国の首都の空港かとわが目を疑がうほどだった。

午後六時三十分のフライト。翌五日、一時間おかれて十一時成田に着いた。

長い旅だったが、仏天の加護により三人共元氣一杯に終始し得たことは、何よりのしあわせだった。

帰国してまだ十日も経ってない。思いつくままに書きなぐった未完稿であることをご了承願いたい。